

## ティーチング・ポートフォリオ

学科：児童教育 氏名：小山久美子

(記入日：2025年 8月 8日)

### 1 教育の責任 (何をやっているか：担当科目)

<2025年 前期>

- 「小学校英語指導法」(児童教育学科 2年 前期 必修科目 2単位)
- 「言語学入門(1)」(国際英語学科 1～2年 前期 選択必修科目 2単位)
- 「英文法Ⅱ」(国際英語学科 2年 通年 選択必修科目 2単位)
- 「英語学特講」(国際英語学科 3～4年 前期 選択必修科目 2単位)
- 「言語コミュニケーション特講Ⅲ」(国際英語学科 3～4年 前期 選択必修科目 2単位)
- 「英語科教育法Ⅰ」(国際英語学科 2年 半期 教職必修科目 2単位)

### 2 理念 (なぜやっているか：教育目標)

教職関連科目については、学生に小学校や中学校・高等学校で英語を指導できる知識と指導技術だけでなく、英語に関する周辺知識も身につけることを目標としている。

国際英語学科専門科目では、学生に英語の構造を理解させ、言語学全般についての基礎的知識、さらに専門的な英語史・国際英語として使用されている英語や語用論について学習させて、英語学・言語学に関する教養を身に付けさせることを目標としている。

### 3 方法 (どのようにやっているか：実践の工夫)

- ・「小学校英語指導法」では、理論と実践(模擬授業)を軸として授業を進めた。毎回授業の最後にクラスルーム・イングリッシュをディクテーションさせ、実践で使用できるようにした。模擬授業では、実践後に児童役の履修生と意見交換し、最後に教員が講評した。
- ・「言語学入門(1)」では、パワーポを用いて説明し、関連するDVDを見ながら質問用紙に記入させ、提出後にコメントを付して返却している(エビデンス1,4)。
- ・「英文法Ⅱ」「英語学特講」では、パワーポ(エビデンス1)や地図、資料を用いて指導した。特に「英文法Ⅱ」では、説明後に練習問題を課し、答え合わせをしながら説明した(エビデンス4)。
- ・「言語コミュニケーション特講Ⅲ」では、毎回のテーマについて、自分の意見を書かせ、次にグループワークでディスカッションをさせ、最後に発表をさせて意見交換ができるようにした。

- ・「英語科教育法Ⅰ」では、英語教育の歴史から、学習指導要領、教授法、第二言語習得、年間計画、評価等について理論を中心に展開し、リスニングの指導法を学習させた後、リスニング中心の模擬授業を実施させた。また、区立中学校に英語の授業を見学に行き、授業展開や教師の役割について知る機会を設けた。

#### 4 成果（どうだったか：結果と評価）

- ・「小学校英語指導法」では、学習指導案を書き（エビデンス 3）、模擬授業を行うことができた。全員がオール・イングリッシュでの模擬授業を目指し、殆どの学生が教室英語を使用した。これは、クラスルーム・イングリッシュの徹底と授業の初めに英語の歌を歌うなど英語に慣れるよう工夫した結果でもあり、効果が見られた。ただ、模擬授業の時間配分や授業展開には課題も見られ、今後は、修正した授業を行う等、複数回の模擬授業ができるようにしたい。
- ・「言語学入門(1)」では、動物と人間の違い等には興味を示したが、言語学の各分野については、興味をもてなかったようである。専門用語が多くなるので、今後は丁寧な説明をしていきたい。
- ・「英語学特講」は内容量が多いため、パワポの資料も多くなってしまった。今後は、説明に時間をかけ、学生が理解できなかった箇所は、翌週に再度説明するようにしたい。
- ・「言語コミュニケーション特講Ⅲ」は、各時間テーマを決め、ディスカッション、発表をしながら授業を進められた。白熱したディスカッションができ、自分と異なる意見を知る機会にもなり、ことばへの関心が高まった。
- ・「英語科教育法Ⅰ」は、理論の面では問題なかった。実践（模擬授業）は、初めてであったが、クラスルーム・イングリッシュも使い、展開も良かった。実際の授業を見学できたことも助けとなったと思われる。

#### 5 今後の目標（これからどうするか）

学生が授業内容を十分に理解できるよう、速度と説明の仕方を工夫していきたい。どうしても内容量をこなそうとするあまり、早口になってしまうので、様子を見ながら進めていきたい。

また、teams を用いながら、授業内での質疑応答を試み、理解度を確認するようにしたい。

#### 6 エビデンスとなるもの（資料の種類などの名称）

1. パワーポイント資料（非公開）
2. 学習指導案（非公開）
3. 練習問題、ブリーフリポート（非公開）

## ティーチング・ポートフォリオ

学科：児童教育 氏名：小山久美子

(記入日：2026年 2月 26日)

### 1 教育の責任（何をやっているか：担当科目）

<2025年 後期>

「言語学入門(2)」(国際英語学科 1~2年 後期 選択必修科目 2単位)

「言語学演習(3)」(国際英語学科 2年 後期 選択必修科目 2単位)

「英文法Ⅱ」(国際英語学科 2年 通年 選択必修科目 2単位)

### 2 理念（なぜやっているか：教育目標）

学生に言語の多様性、世界の言語、言語と脳や非言語コミュニケーションについての基礎的知識を習得してもらい、さらに専門的な英文法の知識（英語の構造）や語用論の知識を習得してもらうため。

### 3 方法（どのようにやっているか：実践の工夫）

- ・「言語学入門(2)」では、資料を配付し、パワーポイントを用いて説明した。さらに、言語の多様性については、関連するDVDを見せたり、教師の実体験を語ったり、多様性について身近なことから理解できるようにした。世界の言語に関しては、各地域の白地図に語族・語派を記入する作業を行わせ、地域と言語について習得してもらうようにした。
- ・「言語学演習(3)」では、意味論・語用論の各項目について説明をした後、自分でその項目についての例文作成や検証を行い、ディスカッションをし、発表してもらい、全員で内容を検討した。
- ・「英文法Ⅱ」では、英語の構造に関して専門的な説明ができるようにするため、多くの易しい英語の例文を提示し、パワーポイントで説明した。各項目が終わる度にテストを実施した。

### 4 成果（どうだったか：結果と評価）

- ・「言語学入門(2)」では、進め方が早かった。学生がしっかり理解できていないところがあった。(エビデンス1、エビデンス2)
- ・「英文法Ⅱ」では、数多くの例文に触れさせたいため、プリント教材を配布し、テストをした。テストは、教科書持ち込みで、正誤問題の説明を書かせたが、教科書に書かれている問題は正答率が高かったが、応用問題は正答率が低かった。応用力をつけられるように、練習問題を多く提供するようにしたい。(エビデンス2)
- ・「言語学演習(3)」では、ディスカッションをしながら進められ、学生の理解度を確認できた。(エビデンス2)

5 今後の目標（これからどうするか）

- ・「言語学入門(2)」は、資料を配付し、パワーポイントを用いて説明したが、進め方が早かったので、今後は、学生に確認しながら進めるとともに、授業後にコメントシートを配布し、理解度を確認するようにしたい。
- ・「英文法Ⅱ」も教科書の他に資料を配付し、パワーポイントで説明し、練習問題を解かせた。練習問題の解答後やテストの返却後に模範解答を示し説明したが、それを聞いていない学生がいるので、間違った箇所の正解だけでなく簡単な説明もノートに書かせる等、正しい英語の構造を理解・習得させるようにしたい。
- ・「言語学演習(3)」は、ディスカッション形式で進め、理解度を確認できるので、今後もこの形式で進めたい。

6 エビデンスとなるもの（資料の種類などの名称）

1. 配布プリント（非公開）
2. 試験（非公開）

## ティーチング・ポートフォリオ

加藤 美由紀

(記入日：2025年9月24日)

### 1 教育の責任 (何をやっているか：担当科目)

小学校教員免許科目、学科科目、共通教育科目を担当している。

#### 【免許に関する科目】

生活科教育法 (2年前期選択必修科目 2単位)

教育実習演習 (事前・事後指導) (3年選択必修科目 1単位) 共同担当

#### 【学科科目】

教職専門演習 (3) (3年次選択必修科目 2単位)

#### 【共通教育科目】

情報リテラシー (1年次前期必修科目 2単位)

生命の科学 (選択必修科目 2単位)

### 2 理念 (なぜやっているか：教育目標)

「生活科教育法」については、小学校教員免許を取得するために必要な生活科の授業を構成する力を身につけることを目標としている。教職専門演習(3)は、小学校理科の教員採用試験対策として行っている演習である。

「情報リテラシー」については、情報の活用、情報セキュリティに関する知識、情報モラルを身に付けることを目標としている。「生命の科学」については、生物学に関する科学的知識をもとに、遺伝技術や環境などの日常生活の中での生命に関する現象や課題についてある程度考える姿勢を身につけることを目標としている。

### 3 方法 (どのようにやっているか：実践の工夫)

「生活科教育法」については、指導と評価の一体化を見通した学習指導案の作成、模擬授業の実施に加え、電子黒板を使用した模擬授業の機会、野菜の栽培実習の機会を設けた (エビデンス 1)。

教職専門演習 (3) は、前半は過去の小学校教員採用試験理科の問題を解き、後半は模擬授業を行うことで、小学校理科の学習内容について、要点を意識して復習することに努めている (エビデンス 1)。

「情報リテラシー」については、情報セキュリティや情報モラルに関する事例を通じた理解、文章作成時の引用の記載などの情報リテラシーを身に付ける支援を行った（エビデンス 1）。「生命の科学」においては、生物学に関する科学的知識の説明とともに、生物多様性保全などの環境問題や、ゲノム編集などの遺伝子技術についての現状、動物倫理学の観点から人と動物の関係についての考え方を複数示し、環境問題や遺伝子技術について学生に考察させる機会を設けた（エビデンス 1）。

#### 4 成果（どうだったか：結果と評価）

「生活科教育法」については、生活科の意義や用いる教材の意味を概ね理解した学生もいたが、具体的な経験を通じた生活科の意義を理解する姿勢の見られなかった学生もいた。昨年の反省をもとに、児童の発言をまとめにつながるような板書に留意して授業構成を検討するように例を挙げて助言を行ったところ、板書の流れに繋がりが見られ、「まとめ」に工夫が見られた学生が多かった。（エビデンス 2, 3）。

教職専門演習（3）では、教員採用試験の問題演習を行うことで、1, 2 年次の「理科」「理科教育法」での学習内容を整理した。理科の模擬授業については、試験時間の中で効果的に知識を伝える方法を確認し、基礎的な授業構成を身に付けた（エビデンス 3）。

「情報リテラシー」については、情報セキュリティや情報モラルに気をつける姿勢が見受けられた。引用の記載については大半の学生は習得していたが、課題が見られる学生もいた（エビデンス 2）。「生命の科学」では、途中学習意欲の低下が見られたが、生物多様性保全の問題やゲノム編集技術応用食品等について文献を読み、自分の考えを述べる姿勢が見られた（エビデンス 2, 3）。

#### 5 今後の目標（これからどうするか）

「教職専門演習（3）」については、教員採用試験の問題演習による学習要点の確認とともに、理科は図を書き示して説明することが効果的であるため、模擬授業における板書の重要性を伝えていきたい。「生命の科学」については、各回の課題で、生命に関する科学技術や環境問題に対して自分の考えを書いていくことで、自らの問題として捉えられるように科学リテラシーを高める機会を引き続き設定したいと考えている。

6 エビデンスとなるもの（資料の種類などの名称）

1. シラバス（公開）
2. 最終レポート（非公開）
3. 各回の提出課題（非公開）

## ティーチング・ポートフォリオ

加藤 美由紀

(記入日：2026年2月24日)

### 1 教育の責任（何をやっているか：担当科目）

小学校教員免許科目、学科科目、共通教育科目を担当している。

#### 【免許に関する科目】

理科教育法（2年次後期選択必修科目2単位）

教育実習演習（事前・事後指導）（3年次選択必修科目1単位）共同担当

#### 【共通教育科目】

情報処理基礎（共通教育2単位） 生命の科学（共通教育2単位）

### 2 理念（なぜやっているか：教育目標）

「理科教育法」については、小学校教員免許を取得するために必要な理科に関する資質・能力を身につけることを目標としている。

「情報処理基礎」は、大学生活でのレポートやプレゼンテーション資料の作成に役立つように基礎的な情報処理のスキルを身につけることを目標としている。

「生命の科学」については、生物学に関する科学的知識をもとに、生物多様性保全、遺伝子技術などの日常生活の中で取り上げられる事柄についてある程度考えることができる姿勢を身につけることを目標としている。

### 3 方法（どのようにやっているか：実践の工夫）

「理科教育法」については、理科の見方・考え方を前提として、学生が実験・実習の模擬授業を構成する過程や、実験結果から考察を導く指導法について、学生が主体的に行動できるように工夫している。今年度は今年の「理科」に引き続き、これまで実験の経験がない学生に対して、演習実験ができるようになることを目的として、実験を一人で行う機会を作り、期末に実験テストを行った。

「情報処理基礎」については、テキストに沿って、Word、Excel、Power Pointのスキルを身につけられるように演習を行い、各回の課題にコメントによるフィードバックを行った。

「生命の科学」においては、生物学に関する科学的知識の説明とともに、生物多様性保全などの環境問題や、ゲノム編集などの遺伝子技術についての現状を示し、環境問題や遺伝子技術、自然や生物と人との関係について学生に考察させる

機会を毎時間設けた。課題についてコメントによるフィードバックを行うことで、学生が科学現象の内容を確認し、科学技術に対する考え方をある程度持つことができるように支援を行った。

#### 4 成果（どうだったか：結果と評価）

「理科教育法」については、複数班分の実験の準備、安全指導、実験方法、結果、考察、後片付けの指導についての一連の流れを学生が習得した。しかし、演示実験を一人でを行うところまで到達しなかった学生も見られた。（エビデンス 3, 4）。

「情報処理基礎」については、テキストに沿って進めることで、学生自身が操作の分かりにくい箇所を確認しながら進めることが出来たが、苦手意識を持つ学生も見られた（エビデンス 3）。

「生命の科学」については、日常生活で目にする生命科学の問題に関して複数の面からの考え方を紹介するようにしているが、今年度は授業後の課題に対して、文献等を調べ、意見を自分の言葉で述べようとする学生が複数見られた（エビデンス 1,2,3）。

#### 5 今後の目標（これからどうするか）

「理科教育法」については、これまで一通りの理科の学習をしてきたため、今後は学生自身が前もって単元の内容の確認と授業中での実験の位置づけを確認する反転学習を行い、一人一人が理科の授業の中で実験を効果的に活かせるように支援を行う。

「情報処理基礎」については、今後も基礎的なスキルを身に付けられるように繰り返し練習する機会を設ける。

「生命の科学」については、生物多様性や遺伝技術など生命科学に関する内容に、発酵や代謝などの身のまわりの生物の働きについての内容を加え、広範な内容を扱うように心がけたい。

#### 6 エビデンスとなるもの（資料の種類などの名称）

1. シラバス（公開）
2. 提出レポート（非公開）
3. Teams 課題配信への提出課題（非公開）
4. 実験テスト（非公開）

# ティーチング・ポートフォリオ

児童教育学科 小倉 京子

(記入日：2025 年 9 月 29 日)

## 1 教育の責任（何をやっているか：担当科目）

- 特別支援教育 (2 年前期 必修科目 2 単位) (児童教育)
- 特別支援教育 (3 年後期 必修科目 2 単位) (中高)
- 介護等体験 (2 年通年 選択必修科目 1 単位) (児童教育・中高)
- 進路指導・キャリア教育 (後期 教職科目 2 単位) (児童教育・中高)
- 教職専門演習 (2) (3 年前期 必修科目 2 単位) (児童教育)
- 教職教養演習 (1) (後期 教職科目 2 単位) (児童教育)
- 教職教養演習 (2) (前期 教職科目 2 単位) (児童教育・中高)
- 教職教養演習 (3) (後期 教職科目 2 単位) (児童教育)

## 2 理念（なぜやっているか：教育目標）

### 私の教育理念・目標

- 特別支援教育は、すべての学校で実施されるものである。よって、教職につく者は、その理念を理解した上で児童生徒の教育に当たらねばならない。文部科学省の調査(令和4年)によれば、小中学校の義務教育段階で通常の学級に8.8%存在する「発達障害の可能性のある特別な教育的支援を必要とする児童生徒」に対して、教師を目指す学生が共感的な理解をもって支援や合理的配慮ができるように、基礎的な知識をもてるようにすることを目指している。また、児童生徒への具体的な支援方法や、他の教職員と協働・連携して支援体制を構築することができるようにするために必要な資質を身につけられるようにすることも目標にしている。
- 教職課程の授業においては、学生の教員採用試験合格を目指して、教職専門、教職教養の知識を身につけたり、現代の教育課題に関して自分の意見を持ち、課題に対して向上心をもって取り組んだりできるようにすることを目指している。そのために、学生が自分自身で調べ考えることを大切にし、その考えを集団で討論し共有することによって、得た知識をさらに深化させることを目

指している。

- 介護等体験においては、社会福祉施設や特別支援学校へ実習に出る前に、確実に知識を身につけることで心の準備をして、実習現場で主体的に活動できること、利用者の一人一人の人格を尊重し、その人の気持ちに寄り添った支援とは何かについて考えられるようになることを目指している。

### 3 方法（どのようにやっているか：実践の工夫）

#### ○特別支援教育

- ・特別支援教育では、特に「インクルーシブ教育システムの構築を目指した特別支援教育の推進」としての基礎的な知識を得られるようにするため、千葉県教育委員会作成の小中学校及び高等学校における合理的配慮事例集を参考として、活用しながら、具体的な支援方法についての理解を進めている。具体的な支援の例では、これまでの教育現場での事例を示しながら解説することで、より理解しやすいように心がけている。また、映像資料を教材として用いることで、講義で学んだ障害の特徴や支援について具体的なイメージがもてるように工夫している。

#### ○教職専門演習・教職教養演習

- ・2年生では講義を中心としつつ演習問題や時事問題について新聞等を活用しながら、現代の教育課題を意識できるようにしている。3年生では、現代の教育課題をテーマごとに学生自身が資料をまとめ、発表したり、討論したりすることでお互いに共有し知識を深め、自身の考えをもてるようにしている。4年生は実際的に、教育課題のテーマにそって集団討論、個人面接形式で、自身の考えを伝えられるようになるまで実践する。

#### ○介護等体験

- ・学生が大学で学修する理論や方法を確実に自分のものとするためには知識だけでなく、教育現場や社会教育施設の現場で実際的に活動することで、児童・生徒または利用者の方々の様子と大学での知識を結びつけ、強固な知識とすることができるようにしている。
- ・体験実習の事前授業では、実際に現場で勤務されている社会福祉施設の施設長や理事長、特別支援学校校長による講話を通して学べるように構成している。授業では既習学生の体験記などを資料として注意点や介護のポイント等を指導し、具体的で実際的な授業を心がけている。また、授業の中で、近隣公民館

で行っている障害者の生涯学習講座「学び舎コホミン」へ参加し、実習の前に障害者との接し方について予め学ぶ経験を設けている。

- ・社会福祉施設での介護等体験が終了した後に、施設での様子や成果をスライド資料にまとめて発表し、学生たちがそれぞれの施設（老人介護・障害者支援）について、他の学生と共有することで着実に知識を身につけ習得することができるように授業を進めている。

#### ○進路指導・キャリア教育

- ・進路指導・キャリア教育では進路指導とキャリア教育の関係を理解し、キャリア発達理論を学びながら、実際に自分自身のキャリアについての振り返りと未来の展望を行い、自己のキャリア形成について分析的に考えられるようにしている。それぞれの学生が目指す学校種に応じて、キャリア教育の授業の実践を構想し、発表を通して共有し、発達段階に応じたキャリア形成のための授業について学修できるようにする。

- すべての授業において毎回、講義用のスライド資料とワークシートを作成している。特に、学生自身が主体的に自分事として学修を進めることができるように、KJ法などによるグループ討議や発表する機会を多く設定するようにしている。

#### 4 成果（どうだったか：結果と評価）

- ・特別支援教育は、毎時間、演習を取り入れることで、特別な支援を必要とする児童生徒への理解を深め、合理的配慮やユニバーサルデザインなどを考え、学生自身が自分事として支援の方法を具体的に考えることができた。
- ・介護等体験では介護等体験・教育ボランティアを経験した学生が体験をレポートやスライド資料にまとめて発表し、共有することで、障害者や高齢者の人格を大切にして、一人一人の状態に寄り添った支援が必要であることに気づき、教師となったときに生かせることを考え、自覚を高めることができた。
- ・教職関係の演習においては、学生が課題に対して事前のレポートを確実に提出し、発表や討論において、自分の考えをもって主体的に発表、発言等を行うことができていた。

#### 5 今後の目標（これからどうするか）

- ・特別支援教育、進路指導・キャリア教育、教職教養演習では、前期よりもさら

に、レポート、発表、集団討論、授業構想のいずれかを毎回取り入れつつ、より実践に近づけて自分事として身につけられる授業を展開したい。

- ・介護等体験では、後期は特別支援学校での体験実習を実施する。事前に特別支援学校の教育課程や校長講話を設定し、より具体的・実践的に、児童生徒に対する理解を深めていく。終了後は、体験をレポート等にまとめ共有することで、実践的をもとにした障害の理解や支援の方法などの知識をより深められるようにしたい。

#### 6 エビデンスとなるもの（資料の種類などの名称）

- ・各授業 スライド資料、ワークシート、リアクションペーパー、課題レポート
- ・介護等体験 体験レポート、実習日誌、体験発表スライド資料

# ティーチング・ポートフォリオ

児童教育学科 小倉 京子

(記入日：2026年2月10日)

## 1 教育の責任（何をやっているか：担当科目）

特別支援教育	(2年前期 必修科目 2単位) (児童教育)
特別支援教育	(3年後期 必修科目 2単位) (中高)
介護等体験	(2年通年 選択必修科目 1単位) (児童教育・中高)
進路指導・キャリア教育	(後期 教職科目 2単位) (児童教育・中高)
教職専門演習 (2)	(3年前期 必修科目 2単位) (児童教育)
教職教養演習 (1)	(2年後期 教職科目 2単位) (児童教育)
教職教養演習 (2)	(4年前期 教職科目 2単位) (児童教育・中高)
教職教養演習 (3)	(3年後期 教職科目 2単位) (児童教育)

## 2 理念（なぜやっているか：教育目標）

### 私の教育理念・目標

- 特別支援教育は、すべての学校で実施されるものである。よって、教職につく者は、その理念を理解した上で児童生徒の教育に当たらねばならない。

小中学校（義務教育段階）の通常の学級には「発達障害の可能性のある特別な教育的支援を必要とする児童生徒」が8.8%存在する（文部科学省・令和4年調査）ことを考えると、その児童生徒に対して教師を目指す学生が共感的な理解や指導・支援、合理的配慮等の基礎的な知識をもてるようにすることを目指している。また個々の児童生徒への具体的な支援方法や、他の教職員と協働・連携して支援体制を構築することができるようにするために必要な資質を身につけられるようにすることも目標にしている。

- 教職課程の授業においては、学生の教員採用試験合格を目指して、教職専門、教職教養の知識を身につけたり、現代の教育課題に関して自分の意見を持ち、課題に対して向上心をもって取り組んだりできるようにすることを目指している。そのために、学生が自分自身で調べ考えることを大切にし、その考えを集団で討論し共有することによって、得た知識をさらに深化させることを目

指している。

- 介護等体験においては、社会福祉施設や特別支援学校へ実習に出る前に、確実に知識を身につけることで心の準備をして、実習現場で主体的に活動できること、利用者の一人一人の人格を尊重し、その人の気持ちに寄り添った支援とは何かについて考えられるようになることを目指している。

### 3 方法（どのようにやっているか：実践の工夫）

#### ○特別支援教育

- ・特別支援教育では、特に「インクルーシブ教育システムの構築を目指した特別支援教育の推進」としての基礎的な知識を得られるようにするため、千葉県教育委員会作成の小中学校及び高等学校における合理的配慮事例集を参考として活用しながら、具体的な支援方法についての理解を進めている。具体的な支援の例では、教育現場での事例を示しながら解説することで、より理解しやすいように心がけている。また、映像資料を教材として用いることで、講義で学んだ障害の特徴や支援について具体的なイメージがもてるように工夫している。

#### ○教職専門演習・教職教養演習

- ・2年生では講義を中心としつつ演習問題や時事問題について新聞等を活用しながら、現代の教育課題を意識できるようにしている。
- ・3年生では、現代の教育課題をテーマごとに学生自身が資料をまとめ、発表したり、討論したりすることでお互いに共有し知識を深め、自身の考えをもてるようにしている。
- ・4年生では、实际的に教育課題のテーマにそって集団討論、個人面接形式で、自身の考えを伝えられるようになるまで実践している。

#### ○介護等体験

- ・学生が大学で学修する理論や方法を確実に自分のものとするためには知識だけでなく、教育や社会教育施設の現場で实际的に活動することで、児童・生徒または利用者の方々の様子と大学での知識を結びつけ、強固な知識とすることができるようにしている。
- ・体験実習の事前授業では、実際に社会福祉施設の施設長や理事長、特別支援学校校長による講話を通して、より具体的に学べるように構成している。授業では既習学生の体験記などを資料として注意点や介護のポイント等を指導し、

具体的で実地的な授業を心がけている。

- ・授業の中で、市内公民館で行っている障害者の生涯学習講座「学び舎コホミン」へ参加し、実習の前に障害者との接し方について予め学ぶ経験を設けている。より理解を深められるように、その後も当講座へのボランティアとしての参加も推奨している。
- ・社会福祉施設での介護等体験が終了した後に、施設での様子や成果をスライド資料にまとめて発表し、学生たちがそれぞれの施設（老人介護・障害者支援）について、他の学生と共有することで着実に知識を身につけ習得することができるようにしている。

#### ○進路指導・キャリア教育

- ・進路指導・キャリア教育では進路指導とキャリア教育の関係を理解し、キャリア発達理論を学びながら、実際に自分自身のキャリア発達についての振り返りと未来の展望を行い、自己のキャリア形成について分析的に考えられるようにしている。学生が、それぞれ目指す学校種に応じて、キャリア教育の授業の実践を構想し、発表を通して共有し、発達段階に応じたキャリア形成のための授業について学修できるようにする。

#### ○すべての授業において毎回、講義用のスライド資料とワークシートを作成している。

##### ・アクティブ・ラーニングの視点

学生自身が主体的に自分事として学修を進めることができるように、KJ法などによるグループワークや討議、発表する機会を多く設定するようにしている。「特別支援教育（中高）」や「進路指導・キャリア教育」では複数学科・複数学年の学生が受講しているため、グループは学科・学年の枠を超えて毎回異なるグループ編成として、コミュニケーション力がより高まるようにしている。

また、調べたことを資料にまとめるだけでなく学生が授業する形式にしたり、スライド資料にして発表したりするようにしている。

#### 4 成果（どうだったか：結果と評価）

- ・「特別支援教育」は、毎時間、演習を取り入れることで、特別な支援を必要とする児童生徒への理解を深め、合理的配慮やユニバーサルデザインなどを考

え、学生自身が実際に教師となったときを想定して支援の方法を具体的に考えることができた。授業の始まり・終わりは手話を用い、終盤は学生自身が手話で自己紹介し合えるような演習も取り入れた。

- ・「介護等体験」では介護等体験実習を経験した学生が体験をレポートやスライド資料にまとめて発表し、共有することで、障害者や高齢者の人格を大切にしてい、一人一人の状態に寄り添った支援が必要であることに気づき、教師となったときに生かせることを考え、教職への自覚を高めることができた。
- ・教職専門・教職教養の授業においては、学生が課題に対して事前のレポートを確実に提出し、発表や討論において、自分の考えをもって主体的に発表、発言等を行うことができた。

#### 5 今後の目標（これからどうするか）

- ・特別支援教育、進路指導・キャリア教育、教職教養演習では、さらに、レポート、発表、集団討論、授業構想のいずれかを毎回取り入れつつ、より実践に近づけて自分事として身につけられる授業を展開したい。
- ・介護等体験では、実習前に、社会福祉施設や特別支援学校の具体的な活動・取組などの知識をもてると実習での主体性が異なることから、できるだけイメージをもちやすい講話、映像教材視聴・解説を設定し、より具体的・実践的に、児童生徒に対する理解を深めていく。終了後は、体験をレポート等にまとめ共有することで、実践をもとにした障害の理解や支援の方法などの知識をより深められるようにしたい。

#### 6 エビデンスとなるもの（資料の種類などの名称）

- ・各授業 スライド資料、ワークシート、リアクションペーパー、課題レポート
- ・介護等体験 体験レポート、実習日誌、体験発表スライド資料

## ティーチング・ポートフォリオ

児童教育学科： 氏名：山口 祐子

(記入日：2025年8月3日)

### 1 教育の責任（何をやっているか：担当科目）

学校体験活動（2～4年次通年選択必修2単位）

教職教養演習（3）（3～4年次後期選択必修2単位）

教育実習演習事前・事後指導（3～4年次通年選択必修1単位）

教育実習（3～4年生通年 選択必修4単位）

学校経営論（学校安全を含む）／教育行財政（2～4年次前期選択必修2単位）

総合的な学習の時間の指導法（3～4年次前期選択必修2単位）

総合的な学習の時間の指導法（3～4年次前期選択教職2単位）

教職実践演習（小学校）（4年次後期選択必修2単位）

教職教養演習（2）（3年生前期選択必修2単位）

教職インターンシップ（事前・事後指導）（3～4年次通年選択必修4単位）

### 2 理念（なぜやっているか：教育目標）

- ・「何を学ぶか」「どのように学ぶか」そして、「何ができるようになったか」を実感できるシラバスを作成し、主体的に学び続けられる学生を育てる。
- ・教員採用選考を通過し、教壇に立つために必要な基礎的・基本的事項を身に付けさせる。
- ・学校体験活動や教育実習を通して、体験することによって現場の雰囲気や取り組み方を肌で感じ、教師になる使命感や自覚を高める。
- ・「総合的な学習の時間」の指導法は、実務家教員として、創意工夫しながら、現場ですぐ活用できる指導を行う。

### 3 方法（どのようにやっているか：実践の工夫）

- ・講義の見通しを持たせる。シラバスを配付し、計画的・継続的に外部講師（専門家）を要請したり、学校参観・小学校での学習支援等外部に赴いて体験をさせたりした。
- ・「講義」「体験」「課題への取組（個・グループ）」「発表」を適宜取り入れる。基礎基本は講義形式で行い、そこから探究すべき課題を設定する。情報収集や協働的な学びを積み重ねながら、個やグループで発表させる。
- ・「評価者」としての力を付けるために、発表時に評価をさせている。また、どの時間においても「振り返り」を大切にしている。教育実習演習では、指導案作成指導に力を入れた。1対1で改善すべきところを伝え、教育実習の精錬授業に生かせるようにした。学生の人数が少なくなったので、模擬授業を45分展開させることができた。

- ・模擬授業後、担当者と学生の評価をフィードバックした。
- ・「学校経営論」は、教員になってすぐに生かせる教材を準備した。「1回から15回の資料と振り返り」・「はじめに」・「15回の講義を受けて～小学校教員になるために心に留めておくこと」・「終わりに」をポートフォリオ（A4のファイル使用）ファイルを作成した。今年度も文部科学省の学校安全eラーニングの視聴を事後学修に3回位置づけた。学生の振り返りに、評価のコメントを毎回5行以上入れた。
- ・教職教養演習（2）は、4年生の集団面接の練習に全力で臨み、学生に力を付けさせた。学生が事前学修の課題に真面目に取り組んだ。面接練習ではキーワードを使いながら、意見をつなぎ、深め合った。互いの意見を聞き合い、教員のアドバイスをメモしながら、臨んだ15回は、協働的な学びによって思考や発言の質が高まるところまで導くことができたと考える。
- ・「総合的な学習の時間」は、小学校希望4名と中高希望の12名の計16名で行った。前半7回を「理論編」として、学習指導要領解説編を中心に、目標や他教科との違い、ウェビング、全体計画、年間指導計画、単元計画、評価、体制づくりについて学ばせた。後半は「実践編」として、4人1グループで追究課題を設定し、パワーポイントを作成し、発表させた。

#### 4 成果（どうだったか：結果と評価）

- ・振り返りや評価カードでは、学生の真剣な取り組みと豊かな感性を感じた。「体験」や「主体的・対話的で深い学び」を重ねる中で、成長する姿を感じた。
- ・事前学修には丁寧に取り組む学生が多く、力を伸ばした。
- ・3、4年生は課題や振り返り等、期日を守って提出する学生がほとんどであった。授業中の態度、協働的な学びへの取り組み、個人の事前学修、全てにおいてきちんと行う学生ばかりで、指導者として教える事への意欲が高まった。充実感・達成感を感じた。2年生は、基本的な生活習慣が身に付いておらず、欠席・遅刻が目立ち、課題の期限が守れないことも多い。凡事徹底を繰り返し指導していきたい。
- ・「総合的な学習の時間」では、中高の学生の取組が素晴らしく、感心させられる場面がたくさんあった。振り返りの中で、4人で協力して1つの追究課題を解決していくよさ、友達のよさに気付けたという言葉は何人もの学生が記していた。PDCAを繰り返すことでよりよいものになっていくことを実感することができたように思う。

#### 5 今後の目標（これからどうするか）

- ・教師になることの「厳しさ」、社会や教育の変革の激しさや、それに対応する教師力が必要なこと等を伝えていきたい。併せて、教師という職業は他では味わうことができない「やりがい」があるということをお話していきたい。「各科目」・「体験や実習」・「教員採用選考に向けて」、それぞれに「目標」をもたせ、自分なりの努力を「可視化（記録をつける）」させ、達成に向けて努力させていきたい。

## 6 エビデンスとなるもの（資料の種類などの名称）

- ・振り返りシート、評価カード、指導案、板書計画、体験レポート等
- ・パワーポイント資料、グループ発表
- ・学生が作った成果物
- ・学生が作った「ポートフォリオ」

## ティーチング・ポートフォリオ

児童教育学科 : 氏名 横山 悦子

(記入日: 2025年8月5日)

### 1 教育の責任 (何をやっているか: 担当科目)

- 国語科教育法 (2年次前期選択必修 2単位)
- 国語科教育法Ⅰ (2~4年次前期教職科目 2単位)
- 国語科教育法Ⅱ (2~4年次後期教職科目 2単位)
- 児童教育演習 (3年次通年必修 4単位)
- 卒業研究演習 (4年次通年必修 4単位)
- 教職専門演習(1) (3年次後期選択必修 2単位)
- 教職教養演習(4) (4年次前期選択必修 2単位)
- 教職実践演習(中・高) (3年次後期選択必修 1単位)
- 日本語と表現(1) (1~4年次選択必修前期 2単位)

### 2 理念 (なぜやっているか: 教育目標)

- ・予測困難な時代を生き抜くために必要な力を『感性』と捉え、共に磨き、鍛えることで豊かな人間性を養い、たくましく生きる力を育む。
- ・言葉や文芸、文化に対する興味・関心を高め、教育実践をリードできる能力と行動力、協調性を育む。

### 3 方法 (どのようにやっているか: 実践の工夫)

- ・どの科目も半期・年間の「ゴール」を明確にし、全体を俯瞰できるようにしている。毎時間、授業の始めに「ねらい」を提示し、主体的・対話的に学び取らせ、終わりには「まとめ」を行い、学習したことを整理させている。
- ・毎時間、「リフレクション」を行い、自己の成長に気づけるようにしている。リフレクションシートは提出させ、必ず教師のコメントを入れる。どんなに小さいことでもできたことを認め、モチベーションが上がるようにしてきた。自信を持たせることで、意欲につなげていく。
- ・講義は得た知識がそのまま終わらないよう、様々な体験を交えながら話したり、講師を招聘したり柔軟に活用できるようにしている。
- ・日本語と表現においては、『感性を磨く』を合言葉に、「俳句」「絵手紙」「ポップ広告」などを作ったりした際、よい作品には「賞」をつけて展示した。これは、序列をつけるためではなく、心を耕すために実施している。芸術作品は点数がつかない分、良いものを感じ取らせる必要がある。また、参加型の授業を実施し、主体的に参加できるようにしている。(日本語と表現)

- ・国語全般においては、主に学習材の分析と授業デザインの理論や方法の定着を行ってきた。その際、「楽しい授業」を追究し、授業台本を書いたり協働的に学んだりして、現場ですぐに活用できるよう工夫した。
- ・国語科教育法では、指導案や板書計画を作成し模擬授業を実施してきた。事前学修として、学習指導案を2週間前に提出させ、一人一人と真剣に向き合い、「よりよい指導案・授業」に向けて個別指導を行った。15回目には、自信を付けさせるため「達成賞」を渡し勇気づけをしている。
- ・国語科教育法Ⅰでは、日本文化の学生が初めての模擬授業となるので、授業前に2回の個別指導を行った。(指導案の書き方と授業の流し方について)。研究室にて、ミニ模擬授業を行い本番に備えさせた。
- ・授業後、2分間「ほめほめシャワー」の時間を設けよかった点だけを伝え合い、課題については、後日、※「評価カード」に記入し授業者に手渡している。  
※A4一枚の授業記録。授業のポイント・よかったところ・改善点などを記したもの。具体的に伝えるために、模擬授業の写真(板書や授業の様子)を添付。モチベーションが上がるよう作成している。

#### 4 成果（どうだったか：結果と評価）

- ・リフレクションシートの内容より、対話することで深い学びができ、自分の成長を自覚できたという記述が多く見られた。
- ・事前の個別指導により、日本文化の学生が力を付け、当日、自信をもって模擬授業をする姿が見られた。また、個別指導の際、悩みを聞くことができ、他学科の先生に繋ぐことができた。(大学全体で学生を育てる)
- ・「評価カード」「ほめほめシャワー」の実践により、自己肯定感が上がり授業中の発表や態度が意欲的になってきた。「作家を目指したい」という学生が現れ、主体的に作品を執筆している。
- ・「俳句コンクール」や「絵手紙」「ポップ広告」などの展示を見に来る学生が増えた。賞をもらった学生は自信となり、もらえなかった学生が再チャレンジする姿があった。

#### 5 今後の目標（これからどうするか）

- ・「感性を磨く」  
予測困難な時代を自分で判断し決断し力強く生き抜くために、『感性を磨く』を合言葉に、豊かな人間性を養っていく。そのために、全ての授業科目を通し心の教育を実践していく。
- ・「個」を大切にする。

教育実践をリードできる資質・能力を育むための土台となる、自己肯定感をあげる。可能性が最大限に引き出されるよう支援していく。

#### 6 エビデンスとなるもの（資料の種類などの名称）

- ・リフレクションシート、評価カード
- ・学習指導案、板書計画、プレゼン資料、パワーポイント等
- ・作品（俳句・絵手紙・ポップ広告・EC・プレゼン資料・小論文・随筆等）

## ティーチング・ポートフォリオ

奥田 順也

(記入日：令和8年2月26日)

### 1 教育の責任 (何をやっているか：担当科目)

児童教育学科科目：「音楽科教育法」(2年次後期必修科目2単位)

「ピアノ実技とソルフェージュ」(選択科目2単位)

「卒業研究」(4年次必修科目4単位) など

(他、幼児教育学科科目「弾き歌い演習」など)

### 2 理念 (なぜやっているか：教育目標)

児童教育学科の科目においては、学習指導要領にもとづき、小学校音楽科の授業を実践できるようにするために、音楽科に必要な知識、技能、音楽表現および実践的な指導法を習得することを目標としている。

### 3 方法 (どのようにやっているか：実践の工夫)

「ピアノ実技とソルフェージュ」では2年次に履修する「音楽科教育法」の基礎となるよう、ピアノ実技と、この実技に関連させながら楽典を扱った。ピアノ実技では、児童が必ず学習しなければならない「共通(歌唱)教材」を主教材として扱った。初心者でも取り組めること、また、ピアノを音楽の授業で弾くことを想定して、右手は旋律、左手は簡易な伴奏で演奏できるようにしている。運指の教授には、担当者が児童の鍵盤ハーモニカの指導のために開発した指導法を用いて、個別だけではなく、一斉で運指を教授できるようにしている。経験者には、さらに弾き歌いができることを目指している。楽典に関しては、「教員採用試験」の過去問に準拠し、小学校音楽科に必要な知識を、時に活動を交えながら行っている。さらに、パワーポイントの機能を駆使して音などを可視化する授業展開は、学生にも受け入れられている。また、経験者が初心者に教えるなどの共同学習も取り入れている。

「音楽科教育法」では小学校音楽科の模擬授業を実施することを目指し、1年次に学習した学習指導要領の理解を深めた。また、学習指導案の作成の仕方と各領域分野の授業づくりについて学んだ。そのための学習指導案の作成の仕方については、小学校音楽科の学習指導案を個人で作成する課題を出すにあたり、「三つの柱」に基づく学習指導案を作成するためのガイドライン(オリジナルの教材)を作成し、これを用いた反転授業を実施した。さらに、「『指導と評価の一体化』のための学習評価に関する参考資料 音楽」に基づく評価規準の設定の仕方を、オリジナルのプロセスドキュメント(オリジナルの教材)により解説した。

授業づくりについては、担当者が各領域分野のデモンストレーションを行った。そして、学習指導要領と指導の関連について、詳しく解説した。

グループで行う模擬授業については、課題とした個人で作成する学習指導案を持ち寄り、

グループ内で模擬授業の内容を検討および学習指導案を再考し、模擬授業を実施した。実施後は、グループごとに実践を想定した総括（振り返り）を行った。

#### 4 成果（どうだったか：結果と評価）

「ピアノ実技とソルフェージュ」のピアノ実技では、半期であり、かつ、楽典も学ぶという極めて厳しい制約があるものの、初心者でも努力次第で、3曲程度、弾きことができるようになってきている。また、これまでこの授業をきっかけに、授業も自らピアノに取り組み、楽曲を演奏できるようになった事例もある。楽典に関しては、教員採用試験に出題される問題を7割解けるようになることを目指しており、これまでこの目標に準ずる成果を上げている。

「音楽科教育法」においては、模擬授業実施に向けて行う一連の活動に全員が関わることによって、Plan（計画：個人での学習指導案の作成とグループ活動による再考）、Do（実行：模擬授業の実施）、Check（評価：学生間のディスカッションおよび担当教員によるフィードバックと、個人およびグループでの模擬授業の振り返り）、Action（改善：小学校での授業実践に繋がる改善事項の検討）、つまりは、授業内で行う学習活動を、現在、教育現場で求められている、PDCAサイクルによる授業改善につなげることで、実践的、かつ、協働的に音楽の授業づくりについて学ぶことができた。

#### 5 今後の目標（これからどうするか）

今回取り上げた2つの授業は、来年度以降、開講される予定はない。そのため、これまでの授業で得た知見（あるいは実態）を、教育現場での実践を見据えた研究活動に生かしていきたいと考えている。

#### 6 エビデンスとなるもの（資料の種類などの名称）

- (1) 「振り返りシート」（非公開）
- (2) 「レジュメ」（非公開）
- (3) 「学生が演奏するピアノの音源」（非公開）
- (4) 「学生が作成する学習指導案」（非公開）

## ティーチング・ポートフォリオ

松本 祐介

(記入日:2026年2月28日)

### 1 教育の責任(何をやっているか:担当科目)

体育科教育法(2年後期必修科目2単位)、スポーツ(共通教育科目2単位)、情報通信技術の活用(共通教育科目2単位)2クラス

### 2 理念(なぜやっているか:教育目標)

児童教育学科科目:教員として必要な知識および技能を確実に習得させることを基盤とする。主体的・対話的で深い学びを学生自らが実践し、学生同士の関わり合いを通じて「より良い授業」を追求し続ける姿勢を養うことが目標である。  
共通教育科目:スポーツや運動を肯定的に捉える感性を育む。生涯にわたる豊かなスポーツライフを実現するため、基本的な知識を身に付けるとともに、「する・観る・支える・知る」という多角的な視点から主体的にスポーツに関わる能力を育成することを目指すものである。

### 3 方法(どのようにやっているか:実践の工夫)

体育科教育法:データに基づく省察の深化

- ・質の高い体育授業の実践に向け、指導案の作成と模擬授業の実践を軸に構成している。
- ・教壇に立った後も成長し続ける「反省的实践家」としての技量を高めるため、模擬授業では客観的データ(期間記録、言葉かけ回数、形成的授業評価)を導入し、毎時間の省察を重視している。
- ・省察内容は Microsoft Teams を活用して教師グループ内で即時共有し、反省会における具体的な改善策の考察に役立てることで、作業効率と分析精度の向上を図っている。

情報通信技術の活用:生成AIリテラシーと教育実践力の育成

- ・Society 5.0の概要やICT、AI(生成AI含む)の動向について、公的機関の資料や動画を活用して多角的な理解を促している。
- ・特に生成AIについては、教育現場での利便性のみならず、利用上の倫理的課題や情報の正確性を検証するファクトチェックの重要性についても議論を行い、

教員として必要なりテラシーの定着を図っている。

・技能面では、Word (学級だより)、Excel (成績処理)、PowerPoint (授業資料) を用いた演習に加え、生成 AI による教材アイデアの生成や校務効率化の試行など、実戦的な活用能力を養成している。

・Google Classroom 等の LMS 演習や、アプリを用いた教育用動画の編集・制作を行い、ICT を多角的に活用できる能力を身に付けさせている。

スポーツ科目：実技科目では、学生の主体性を尊重し、授業後半はグループごとのオリジナル練習や、学生自身による試合運営を導入することで、自律的な活動を促進している。

#### 4 成果(どうだったか:結果と評価)

情報通信技術の活用:生成 AI を含む最新技術の特性を理解した上で、Word・Excel・PowerPoint を用いた校務処理技能や LMS の運用、教材動画制作等の実践的な ICT 活用能力を修得するに至った (エビデンス 1)。

体育科教育法:省察及び反省会での改善案を踏まえた指導案の修正を行い、全員が割り振られた学年・領域の指導案を完成させた (エビデンス 2)。

#### 6 エビデンスとなるもの(資料の種類などの名称)

- 1 学生の作成した学級だよりと映像教材 (非公開)
- 2 学生の作成した指導案 (非公開)

# ティーチング・ポートフォリオ

学科：児童教育 氏名：山口恭平

(記入日：2026年 2月 28日)

## 1 教育の責任 (何をやっているか：担当科目)

<2025年度>

「教職論」(中高教職科目 2単位)

「教育課程論」(児童2年前期 選択必修科目・中高教職科目 2単位)

「教育原理」(中高1年後期教職科目 2単位)

「教職論」(国際英語教職課程科目 2単位)

「教育原理」(国際英語教職課程科目 2単位)

「道徳の理論と指導法」(児童2年後期 選択必修科目・中高教職科目 2単位)

「児童教育演習」(児童3年 通年 必修科目 4単位)

「教職実践演習」(児童4年後期 [3回分] 教職科目 2単位)

「教職実践演習」(中高4年後期 [12回分] 教職科目 2単位)

「教職実践演習」(中高4年後期 [12回分] 教職科目 2単位【特別開講】)

「教育実習演習(中高) 事前・事後指導」(中高3年後期・4年前期 [田中聡教授と共同] 教職科目 2単位)

「教育実習演習(中) 事前・事後指導」(児童4年 [田中聡教授と共同] 教職科目 1単位)

「川村学園と女子教育史」(共通教育 選択科目 2単位 オンデマンド授業【我孫子・目白】)

「卒業研究演習」(児童4年後期 必修科目 4単位)

「卒業研究」(児童4年 必修科目 2単位)

「比較教育学演習(2)」(大学院比較文化専攻 必修科目 2単位)

「ジェンダー教育学(2)」(大学院比較文化専攻 必修科目 2単位)

## 2 理念 (なぜやっているか：教育目標)

担当科目のほとんどが教職科目であるが、基本的に教育に対してさまざまな観点から物事を考えられるように心がけている。とくに教職科目では、将来教員となることを想定し、教育に関して柔軟な見方をとれるように、教育の原理的なところまで掘り下げながら、多面的多角的な視点から教育について考えることができる力を身につけることを目指している。

## 3 方法 (どのようにやっているか：実践の工夫)

・「教育原理」では、事前に配布したワークシートと資料を中心に学習を進めた。適宜映像の視聴などを取り入れ、ディスカッションなどによるアクティブラーニングを心がけた。

・「道徳の理論と指導法」では、最終目標を学習指導案の作成に定め、そこに向けて、道徳

教育の目的論や発達の理論など理論的な話を授業の前半に配置し、後半をより実践的な授業論などでかため、学習指導案の作成へ向かえるように授業の流れを工夫した。

・「教育課程論」では、事前に配布したワークシートと資料を中心に授業を進めた。適宜、学生が個人やグループで授業内容を反芻しながら考察することが必要な課題を課し、学修効果を高めることを目指した。

・「教職実践演習」では、半年後には教壇に立つ学生が自らの教育実践を広い視野から捉えることができるように、「理論と実践の往還」を念頭に、実践的な教材においても理論を重視しながら授業を行った。

・「児童教育演習」「卒業研究演習」では、資料をもとにしたディスカッションを基本とした。心がけたことは、できる限り学生に話してもらい、教員としては要所所で議論の方向付けをすることである。

・「川村学園と女子教育史」では、オンデマンド授業ということで、パワーポイントによる講義動画を視聴してもらい、毎回授業内容に関する理解を求める選択問題と発展的考察を求める論述課題を課すという方法をとった。

・「比較教育学演習(2)」では、教育学という学問にあまり馴染みのない受講生であることを念頭に、教育学の基本的概念を紹介するとともに、文化間の教育の違いについて理解を深めることのできる映像作品や文献を用いてディスカッションを行った。

・「ジェンダー教育学(2)」では、「比較教育学演習(2)」で学んだ知見を踏まえた上で、小玉重夫『シティズンシップの教育思想』や J.バトラー『ジェンダー・トラブル』を読み解きディスカッションを行った。

#### 4 成果（どうだったか：結果と評価）

・「教職論」「教育原理」では、中高教育課程単独の開講であった。熱心に取り組む学生とそうでない学生の差を実感することもあり、そこに丁寧に対応できたかどうかは反省が残る。とはいえ、熱心に取り組む学生は学習内容と他分野や実体験と結びつけて考えを深めることができている、それは授業において提出された課題においても見てとることができた（エビデンス 1）。

・「道徳の理論と指導法」では、道徳に対する多角的な視点を強調したためか、今年度も道徳には正解がなく難しいと感じた学生も多く見られた。この点は、来年度も引き続き課題としたい。しかし、道徳に対する多面的な視点を肯定しつつ、生徒を善へと導こうとする姿勢が学生が作成した学習指導案からもうかがえたので、授業の目標はおおむね達成できたと考える（エビデンス 2）。

・「教育課程論」では、レポート等から、学生が授業内容について主体的に考察していることがうかがえた（エビデンス 1）。

・「児童教育演習」「卒業研究演習」では、今年度も、学生から主体的にディスカッションができるゼミを楽しんでいるという旨を伝えられた。学生が主体的に教育を深く考察しよ

うとしているさまは、レポートや卒業研究に見られる課題設定からもうかがえる。特に「卒業研究演習」において、卒業研究の執筆に向けて懸命に文献と向かい合い葛藤する学生の姿には、教員として大いに励まされた（エビデンス 1）。

・「川村学園と女子教育史」は、初のオンデマンド授業ということで、興味をもってもらえる教材を作るように心がけたが、それが十分達成できたかは心もとない部分もある。しかし、学生が授業内容について真摯に考えていることは、レポート等からうかがえた（エビデンス 1・3）。

・「比較教育学演習（2）」「ジェンダー教育学（2）」では、それぞれ研究領域も含めバックグラウンドの異なる者同士で、毎回興味深い論点が出てきて、私自身も含め満足度の高い演習を行えたのではないかと考えている。

## 5 今後の目標（これからどうするか）

来年度もまた、学生の理解度や興味関心、必要としていることに十分に配慮しつつ、より学修効果の高い教材や題材を用いるように授業改善につとめていく。

## 6 エビデンスとなるもの（資料の種類などの名称）

1. レポート・課題（非公開）
2. 道徳科学習指導案（非公開）
3. 2025年授業評価アンケート（前期・後期）（非公開）